
だめになったひとたち

れみどれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だめになつたひとたち

【Nコード】

N3370M

【作者名】

れみどれ

【あらすじ】

幻想郷のある所に・・・紅魔館と言うお屋敷が建っていた
そこにの地下には少々気がふれている吸血鬼の少女が幽閉されている
その少女の名は フランドール・スカーレット
悪魔の・・・妹であった

「こっちょよ！フラン」

「待つてよー！ おねえさま！」

楽しかった日々。 風でゆらゆらと緑が揺れる草原
日傘を手に、二人の少女はそこを駆けていた
けど。 あの日々は・・・今は幻

鈍い音が二回する。

薄暗く、肌寒い。 そして不気味。

宵闇の密室。 鉄の扉が叩かれる音がそこに二回木霊した

「・・・フランお嬢様。 食事です」

一方的にしか開かない扉の下方の小さな戸
そこから、小さなパン。 そして紅茶が渡された

「ありがとう。 咲夜。 いい夢の途中で起こしてくれて」

憎しみ・皮肉・怒り。 様々な感情を込め、少女はそう言った
・・・が、咲夜と呼ばれた、扉の奥に居る女性は何も反応せず、朝
食を置くとその場をすぐに去った

「・・・そうよね。 私なんかとおしゃべりしたくないわよね！！！！」

！
」

パンを掴み、食べようとする
が……掴んだ瞬間、パンは粉々になってしまった

「あら大変。　パンが壊れちゃった」

今度は壊さない様に、ティーカップを持つ

その横に備えてあった小さな瓶を見て、少女は小さくホホエ ندا
黄色く、ところどころから顔を出すオレンジ色の果肉

瓶の蓋を開ければ果実の甘く、鼻を透き通るかの様なさわやかな香
りがした

そして小さなスプーンでそれをすくい、ティーカップへと運ぶ

ポチャン……

紅茶が何重にも波打ち、そしてマーマレードジャムが浮かぶ

僅かに紅い紅茶に丸く浮かんだジャム。　まるで夜空の満月のよう
だった

少女がカップを口元へと運ぶ

吐息が微かに、紅茶へ伝わり夜空が揺れる……

「……」

ティーカップに口を当てた所で少女は、それを口から放した
次の瞬間、彼女はそれを後ろへと投げ捨てた

パリン！　……ポタ……ポタ……

カップは勿論割れ、紅茶が床に滴る

床の紅い紅い液体に紅茶の微かな紅色は飲み込まれ、真つ赤な液体がそこに広がった

そして・・・小さな満月がそこに浮かぶ・・・

「アハ・・・ハハ・・・ハハハハッ！」

「ハハハハハハハハハ！」

地下で一人叫ぶ少女。

フランドール・スカーレット。 495歳・・・

「今夜の空は綺麗ね」

紅魔館のテラス。そこには一人の主と一人の従者が居た主・・・レミリア・スカーレットはティーカップを片手に、テラスの塀へとよし掛かっていた

そして夜空を見上げ、紅茶を時々啜っていた

空には雲と言う雲は無く、あるのは一つの満月

僅かに紅みが掛かった満月だけだった

それを見つめるレミリアは微笑み、とても気分が良さ気だった

「所で咲夜、ちゃんとフランにご飯は・・・」

「渡しておきました」

即答する女性。 銀髪の三つ編みで、メイド服を瀟洒に着こなす従者

十六夜 咲夜の姿が其処に在った

「・・・様子はどうか？」

レミリアが咲夜にそう聞く

咲夜は・・・いつも通りです。 と答えた

そう・・・と呟き、レミリアは再び空を見上げる

「あの子は・・・何故、あんな力を手にしてしまったのかしら・・・ね」

「あの子の翼は、私の翼とは違う。・・・自らの運命を滅ぼす翼」

「・・・・・・・・紅い紅い眼は不吉の象徴かしら。 皮肉にも似ているのはそれだけ」

紅茶を啜り、レミリアはそう呟いた

「あら・・・お人形さん真っ赤ね？」

宵闇の地下に響くその声は幼く、何処か悲しげだった

私が綺麗にしてあげる。 そう言うが如く、彼女は腕で人形を擦った

「綺麗になっただじゃない」

右腕が真っ赤に染まったフラン。

左手には紅い跡が若干取れた熊のぬいぐるみがあった

「……何かいう事はないの？ お人形さん」

フランはそう語り掛ける

が……人形は何もしゃべらない

……そう、人形なのだ。

只の人形。

「……貴方はいつもそうね。一言もしゃべりもしない」

「あの人形さんみたいに少しぐらいしゃべってくれてもいいんじゃないの？」

「でも……もうあの人形さんもシャベラクナッタケドネ……」

「

部屋の片隅。首から上が碎けた形で、血塗れになって倒れている人形がそこに在った

黒く、魔法使いを思わせるかの様な服に、紅に染まった白いエプロンを着衣した人形がそこに……。

ゴンゴン

「……今度は誰かしら？」

二回響いた鉄の音、しばらくすると、その扉が勝手に開いた
その先に居たのはレミリア、そして咲夜だった

「・・・フラン」

「あらあら・・・お姉さま。　こんな所に何の用?!」

フランドールが目の色を変え、そう言う

咲夜がナイフを構える。　がそれをレミリアは抑止した

「何で止めるの?　お姉さま。　私はいいのよ?」

「だってあんたをコワシタイカラ!」

レミリアの後ろへ回ったフランがそう言う

鋭い爪。　そして腕を、レミリアの首へ一直線に振り下ろした

キンッ!

ナイフと爪が交叉し、そこでぶつかりあった

「あら咲夜!　なかなかじゃない!」

レミリアが咲夜!　と再び抑止を駆ける

で・・・ですが・・・　と戸惑いながら、咲夜はナイフでフランの爪
を必死に押さえる

「何で？ 何で邪魔するのお姉さま?!」

「いいじゃない! ……あ……分かった」

「お姉さまも……お人形がほしいんだ」

「何を言ってるの……にん……ぎょう?」

フ란の視線の先をレミリアが見つめる
薄暗く良く見えない。 フ란の視線の先
部屋の片隅……頭が壊れた、魔理沙の姿がそこにあった

「まりっ……っ!!!!!!」

口を押さえ吐き気を押さえるレミリア
フ란はソレを見て、笑い始めた

「変なお姉さま! ただのお人形じゃない!」

咲夜もそれを見る

そして……途端にナイフを構え、フ란へと向って行った

「妹様……お許しを!」

ナイフを振るう

……が、それは弾かれ、レミリアの真横へと飛び交った

「咲夜!」

レミリアが叫ぶ。

フランが羽交い絞めの状態で咲夜の首に爪を立てていた

「うふふ・・・っーかまえた」

「お姉さま？ お姉さまのお人形。 私が貰うね」

「なっ・・・何をするつもりなの・・・フラン・・・」

フランの右手が咲夜の後頭部を鷲掴みにする

そして・・・徐々に力が入って行く

ミシ・・・ミシ・・・と骨が軋む音がそこへと響き渡る

「あっ・・・っあ・・・っ！」

咲夜が強く目を閉じ、痛みを訴える

拳が強く握られながらも、左手をゆっくりと自分の腰へと持っていく
次の瞬間、腰から咲夜がナイフを取り出した

それを後ろへと勢いよく振りかざす

・・・だがかし

「フラン！ やめなさい！」

ドシュッ

「・・・あーあ。 やっぱり壊れちゃった」

カラン・・・カラン・・・

ナイフがそこに落ち、紅い水溜りの中に咲夜が倒れた
いや・・・もはやそれは咲夜ではない。

フランにとってはただの壊れたお人形でしかなかった
魔理沙同様、頭が無くなった・・・壊れた人形でしか・・・
次の瞬間・・・悲鳴が響き渡る

だが

その

悲鳴は

フランのものだった

「・・・・・・・・」

紅い槍、グングニルがフランの胸を貫通していた

「イヤッ・・・・・・・・ゴホッ！・・・・痛い・・・・いたいよう・・・・！」

手が震え、涙を流すフランがそこに居た

彼女に映っていたのは微かに微笑んでいたレミリアの姿だった

「・・・・・・・・終わりよ。フラン」

「そ．．．んな．．．」

「イヤだよ．．お姉さま．．．」

「私は．．私は！」

レミリアが右手を前に掲げる

「ただ．．．！」

「ただ．．．」

「ただあそびたかつ - 「ハートブレイク」」

「・・・・・・・・・・だ・・・・・・・・・・け・・・・・・・・・・」

ドサりと、崩れ去った一人の少女

胸には槍が突き刺さり、目を開けたままそこに倒れていた
そして、幼きもう一人の紅き月は、ふふっ・・・と笑った

「サヨナラ・・・・・・・・魔理沙。 咲夜。」

「そして」

「馬鹿な妹、フラン」

スぺルオン

「マイハートブレイク」

ドサッ・・・・・・・・

そして地下には壊れた人形が4つ並んだ・・・・・・・・

（後書き）

さて、今回は有名なオーエンVocalアレンジ。

efs...さんのdOwN the drain の自己解釈小説。となりました・・・。

阿部左さんの透き通った声が良い、最高のアレンジ・・・でしたなあ・・・。

ああ・・・引退してしまわれて、とても残念です・・・。

今回の小説ですが、原曲（と言ってもアレンジ）ではフランとレミリアの視点が入り混じって描写されました。

それ故・・・難しかったですね・・・。

元々、情景描写は苦手（嫌い）なので・・・。

セリフだけで強引に突破するなんてザラにありますね（笑

最期の最期で、まあお決まりと言えばお決まりのパターンなんですが・・・

もし物好きな方が居れば、dOwN the drain を聞きながらもう一度読んで見ては・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3370m/>

だめになったひとたち

2010年10月9日19時55分発行